

## 「メアリー・ダグラスの両義的動物」について

藤山, 正二郎  
福岡大学

<https://doi.org/10.15017/2231614>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 7, pp.16-18, 1980-03-31. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :

## 「メアリー・ダグラスの両義的動物」について

藤 山 正二郎

この小論はメアリー・ダグラスの動物分類における異常な動物についての仮説を簡単に検討するものである。

アフリカのレレ族はセンザンコウを儀礼の対象とし、いろんな宗教的意味を与えている。センザンコウはからだと尻尾全体が魚のように鱗におおわれ、四つ足で、木に登る。さらに、それは深い森に住む動物だが、時には人間の居住地に侵入してくる。このようにセンザンコウはレレ族の動物分類カテゴリーに逸脱しているから特異な動物であるとダグラスは言っている<sup>(1)</sup>。

このような動物のシンボリズムの研究が進むにつれてダグラスに対していろんな批判がなされている。

例えばタンビアは東北タイの調査から次のように言う。一つの社会の動物カテゴリーの形式的図式からの単純な推論では不十分であり、そのカテゴリーに対してその民族が与えている価値づけとその世界を秩序づけている中心原理を明らかにしなければならない。タンビアの中心原理は彼の論文では、親族とインセストと婚姻の秩序づけと、社会的距離の概念、それらに関係する社会的関心と価値にある<sup>(2)</sup>。

また、ダグラスは、豚はヘブライ人にとってけがれた動物であると言う。それは旧約聖書にあるがごとく、分類的に異常であり、他の家畜のようにひづめがわれているのに、他のひづめがわれている動物とは異なり、反すうしないからである。バルマーはこのような説明は単純すぎて、元来、牧畜民には豚は禁忌であり、現在の中東、イスラム世界、多くの西ヨーロッパ人にも豚は禁忌の対象となっている理由を説明できていないと言う<sup>(3)</sup>。

ダグラスは、豚というシンボルは古代ヘブライの時代には、全体的なシンボル体系において意味をもっていたが、その社会的コンテキストが失われると、シンボルへの認識がかすんでくると言う。だから、歴史的な理由を求める他にはない。マカベ書にその理由が書かれてある。ギリシャがイスラエルを征服した時、ギリシャのアンティオコス王は服従のシンボルとして、イスラエル人に豚肉を食べることを求めた。ここにおいて、豚肉を食べないことはイスラエル民族集団への忠節のシンボルとなった<sup>(4)</sup>。

このような説明では、バルマーの批判はもっともである。動物の特異な地位を、動物の外見的特徴や行動、つまり動物の民俗的分類の問題としてしまっただけではダグラスのように単純な説明になってしまう。しかし、ダグラスはその後、批判をうけいれて、この問題をより広い民族誌的なコンテキストに位置づけて考え直している。

彼女はイスラエル、カラム、レレという3つの分類体系を考え、まず、イスラエル人にとって豚のように、すべての異常なものは悪であり、特定の分類に位置づけて、異常なものが持つ不吉な因果関係はそこだけで行なわれる。カラム族にとって異常なもの、例えば、ヒクイドリは両義的であり、その危険な影響を防ぐため、ヒクイドリをかこむ規則をもっている。レレ族は、ある異常なものは善であり、あるものは

悪であると思なす<sup>(5)</sup>。

彼女はこのような規則やカテゴリーは社会的相互作用の中で発生すると考え、非常にデュルケムに忠実である。つまり、自分の先の論点には社会的なものが抜けていたことを反省し、次のように考える。

自然のカテゴリーの境界は、社会的境界に許されている包含と排除と平行を示すように予想される。出生と婚姻の構造化に基礎をおく社会では、最も重要な交換は女の移行であろう。分類体系の特性に由来するというデュルケムの考えを追求し、では境界がぼやけるとはいかなることか。それには社会体系の境界をぼやかす、つまり境界を越えて行なわれる女の交換と関係するのではないだろうかとダグラスは考える。

次に、3つの民族の婚姻について述べてみよう。親族の中に他所者を入れる婚姻規則に関してみると、レレ族は、かなり広い範囲で女の交換が行なわれており、また、母系社会であるレレ族での父親の立場も尊重されている。レレ族は、交叉イトコの子供の間の結婚が規定されている「基本構造」の社会であり、この「基本構造」の社会は他所者を親族の中に婚姻によって入れるのである。

3つの民族の中で、他所者との縁組に一番閉鎖的なのがイスラエル人である。例えば、婚姻規則として、第1イトコとの結婚が許されているが、自分の妻の兄弟が自分の父の息子である場合、これは内婚であって、交換の価値を否定している。

古代社会についての親族関係資料が不足しているのでダグラスも苦労しているようだが、アラブの遊牧民には比較的、近親の結婚が多いようである。例えば、イスラエルのベドウィン族では、2人の兄弟が年頃の息子と娘を持っていたら、彼らは結婚すべきなのである。このようにして、男系出自の絆を強めていくのである。

カラム族はインセスト禁止の規則によって婚姻をすすめていく「複合構造」の社会である。彼らは、タロ畑の耕作や祭の時には、イトコや姻族といったいわば他集団に頼る必要がある。つまり別の男系集団に彼らは属しているのである。しかし、彼らはタロ畑を取ろうとしたり、妖術を行なう危険性をもっているとも考えられている。

レレ族では姻族は肯定的な意味をもっていたのに、カラム族では、姻族の労力は頼りになるが、不安の種でもある。

まとめてみると、交換によって何も失うものがなく、すべて得るものばかりの民族では、雑種的存在、つまり人間／神、人間／動物といった相反する記号をもった存在に傾き、それに反して、他所者に対する経験が不吉である民族は、完全なカテゴリーを大事にし、交換を排除し、媒介の原理を拒否するのである<sup>(6)</sup>。

このような仮説を他の民族に適用してみよう。対応する資料が不足しているのでかなり不十分であるが、マンダリ族についてはどうであろうか。マンダリ族には「ライオン＝人間」という信仰があり、隣接する他部族からやってきて、恐怖の対象となっている。ただし、婚姻がそれほど限定されているわけではなく、マンダリ族をこえて、隣接するナイル系民族との結婚も行なわれている<sup>(7)</sup>。

結論をいそげば、やはりダグラスの仮説は単純化されていて、概念的なものは社会的なものの現われだとする *sociability fetishism* におちいつている。

サーリンズはまた次のように批判する。ダグラスはシンボル間の有縁関係に力点をおいて、文化的内容

の多くを失っている。象徴的要素（婚姻関係、リネージ、動物カテゴリー、食物タブーなど）を記号として、相互の機能関係に関心がある。しかし、有縁的記号（シンボル）は意味するものと意味されるものとの間に概念的適合性はなく、はみだしてしまうのである。例えば、食物タブーと排他的社会集団の間に、論理関係があると、それらは相互に意味するものと意味されるものになる。だが、それぞれの中で、意味作用があるわけだから、単に互いのアナロジーでは、それぞれの意味をくみつくすことはできない。<sup>(8)</sup>

このように、概念と社会を単純に対応することはさけるべきであるが、コスモロジー内でのいろんな次元での論理的対応関係をさぐる上においてはダグラスの試みはいろんな示唆を与えてくれる。

## 注

- (1) Douglas, Mary "Animals in LeLe Religious Thought." Africa, Vol. 27, 1957.
- (2) Tambiah, S. J. "Animals are Good to Think and Good to Prohibit." Ethnology, Vol. 8, No. 4, 1969.
- (3) Bulmer, R "Why is the Cassowary not a Bird." Man, Vol. 2, No. 1, 1967.
- (4) Douglas, Mary, Natural Symbols, 1973, Penguin Books, PP.60 - 64.
- (5) Douglas, Mary, "Self - evidence" - in, Implicit Meanings, 1975, Routledge & Kegan Paul.
- (6) ibid.
- (7) Buxton, J., Religion and Healing in Mandari, 1973, Oxford U.P. P.2, PP.251 - 274.
- (8) Sahlins, M, Culture and Practical Reason, 1976, U. of Chicago Pr. PP.114 - 120.

※ 研究会での発表「人類学におけるシンボリズム研究序論」は、福岡大学人文論叢、第10巻、第3号、1978、にまとめましたので、本誌には別の短文を発表しました。